

「傘はりおつねさん」

こうちけんこうちし
高知県高知市のお話 はなし

とんとおかし

こうち こうだ
高知の神田に、おつねさんというて、傘はりのじょうずな娘さん
むすめ
んがおったそうな。

ある日、おつねさんが、いつものように傘をはりよると、急に
きゆう
おおかせ ふ
大風が吹いてきて、干してあった傘が飛んでいきそうになったと。

いちばんき
ほんで一番気にいった傘をおさえちよると、あつというまに空へ
そら
まいあがったそうな。

そこでおつねさんは、傘につかまって、空を飛んでゆきよつたと
そら と
ころ、下の方をやっぱり飛んでいくもんがあると。
した ほう と

よう見ると、しりあいの猟師の権助じゃつた。
み りょうし ごんすけ

「ほーい、ゴンスさんよーッ、おまさん、どこへ行きよるぞね」
い

「おらに聞いてもわかるか。鴨にとられていきよるきに、この鴨に
き き かも
きいてくれや」

こんな軽口をたたきながら、二人は道づれになって、どんどん
かるくち ふたり みち
どんどん空を昇って、いつのまにやら、お月さんの世界へ着いちよつ
そら のぼ つき せかい つ
たと。

ほいたら、十五夜お月さんが出てきて

「やあやあ、お待ちしよりました」

と、ニコニコ顔でいうし

「遠い所から、よう来てくれましたのうし」

「まあ、ゆっくりしていてつかされ」

と、十六夜、十七夜、十八夜と、お月さんが順番にあいさつに
やってきましたそうな。

ほいて最後に、三日月さんがやってきましたき、よう見たらやせこ
けちよる。ほんでおつねさんが聞いたと。

「三日月さん、おまさん、なぜそんなにやせこけなすったぞね」

「わたしやね、病みあがりじやき、ほんでやせた」
と、いうたそうな。

さて、おつねさんは、月の世界でもやっぱ得意の傘はりを
しよった。けんどそのうちに、ふるさとの土佐が恋しうなつて

「もうぼちぼち高知の方へ、いなしてくれませんろうか」
というど、

「ありや、まだえいじやございませんか。もうちつと、月の世界に
おってつかさい」

と、お月さんがいうたと。

「けんど、もういなんと、とうさんもかあさんも心配しんぱいしよりま
すき、ほんでいなしでもらいます」

おつねさんは、ようよ月の世界つき せかいからもどいてもろうた。

そのとき、月の世界つき せかいではった傘かさを、おみやげつきにおいてきたと。

ほんで雨が降りあめ ぶんそうになると、お月さんはその傘かさをさすきに、

雨あめふりの晩ばんにはお月さんがみえんようになるつきそうな。

おかしまつこう、さるまつこう